

# ロータリー運動の核心

第2680地区パストガバナー 深川 純一

ロータリーは、倫理運動であるが故に巨大な組織に発展してきた。しかしながら、今日ロータリーはひ弱な巨人になっていないか。会員の減少、それはロータリーに魅力がなくなったからではないか。先輩たちが確立したすばらしいロータリーの基本原則を守り、ロータリーの魅力と信用を取り戻そう。

## ロータリーは倫理運動

まず、私の話の根底に流れる思考は、ロータリー運動というのとはひとつの倫理運動であるということであり、ロータリークラブは寄付団体でも、慈善団体でも、ボランティアの団体でもございません。一言で言えば倫理を提唱していくことによって、世のため人のために動いていこう、という団体なのであります。そのことは、「ロータリーの綱領」（ロータリークラブ定款第三条）を読むと、一目瞭然にわかります。

例えば、たばこの吸い殻が街角に落ちてるとします。ロータリアンがそこを通りかかると、町を美しくするために、そのたばこの吸い殻を拾うでしょう。この行動は、誠にささやかではありますが、社会奉仕の範疇でとらえることができます。しかし、ロータリーの奉仕の本願はそこにはないのであります。たばこの吸い殻を捨てない人を育てるところにロータリーの本願がある。人を育てること、道徳を守る人間をつくること。そのことによって、世のため人のために動いていこう。見方を変えれば、それはまさに倫理運動だといえるだろうと思うのであります。

今日、ロータリーが倫理運動であるが故に巨大な組織に発展して参りました。しかしながら、それがひ弱な巨人になっていないか。ラビッツア R I 会長は、このロータリーの現況を冷静に分析し、その結果、「ロータリーの衰退が始まっている。一番の問題は会員の減少である」と言っておられます。

それでは、いったい会員の減少の原因は何か。不況が原因なのか。それもあるかもしれない。しかし、アメリカは好況であるにもかかわらず、会員がどんどん減少しています。ラビッツア会長の結論は、「不況も原因の一つであるかもしれないが、最大の原因はロータリーに魅力がなくなったことにある」と。

では、なぜ魅力がなくなったのか。ロータリアンすべてが、先輩たちが確立したすばらしいロータリーの基本的な原則を守らなくなってきた。そのためにロータリーの信用が落ちて新会員の心をつかむことができなくなっているのであります。

日本のロータリーに目を向けてみましょう。例会出



## ●プロフィール

昭和5年2月14日生まれ。伊丹ロータリークラブ会員、マルチプル・ポールハリスフェロー、ベネファクター、メモリアル・コントリビューター、米山功労者  
職業分類/シニア・アクティブ（弁護士・民事）  
学歴/昭和27年 関西学院大学法学部卒業  
兼職/学校法人 大阪学園理事長、社会福祉法人伊丹社会事業協会理事長  
公職/〈裁判所関係〉調停委員、司法委員、参事員、鑑定委員等  
〈法務省関係〉人権擁護委員  
〈自治体関係〉伊丹市公平委員長、伊丹市建築審査会委員等

## ●ロータリー歴

昭和48年3月 伊丹ロータリークラブ入会  
平成2年7月 1990～91年度 R I 第2680地区ガバナー  
平成3年12月 アジア第1第3ゾーン研究会パネリスト  
平成4年1月 1992年度 R I 規定審議会代議員  
平成4年9月 R I 第2540地区大会・R I 会長代理  
平成4年10月 R I 第2590地区大会・パネリスト  
平成5年4月 R I 第2510地区大会・パネリスト  
平成6年10月 R I 第2800地区大会・情報セミナー講師  
平成7年4月 R I 第2810地区大会・パネリスト  
平成7年11月 R I 第2730地区大会・セミナー講師  
平成8年7月 1996～97年度 R I 新会員教育実行グループ第3ゾーン・コーディネーター  
平成8年10月 R I 第2780地区大会・R I 会長代理  
平成9年4月 R I 第2700地区大会・特別講演・講師  
平成9年7月 1997～98年度 R I 会員教育グループ第3ゾーン・コーディネーター  
平成9年10月 ロータリー研究会・パネリスト  
平成10年11月 R I 第2670地区大会・パネリスト

席はロータリーの核にある一番大事な原則です。私どもが入会したときは、「例会出席は、最後まで100%出席するのがロータリアンとしてのマナーだし、むしろ、これはロータリー以前の人間としてのマナーである。途中退席など相手に対して失礼極まることだ」と教えられました。

今はどうでしょうか。規則では60%出席すれば出席になります。ところが、この規則さえ守られなくなってきました。食事が済み、報告が終わると、卓話

の始まる直前に堂々と帰っていきます。これでは50%しか出席していない。それにもかかわらず、そのクラブはメークアップカードを渡しています。そのことを恥ずかしいとも思わない。当然のごとくやっている。一体、ロータリアンの誇りはどこへ行ったのか、と思うのであります。あらゆるところで、ロータリーの基本的な原則をみんなが無視している、というのがラビッツア会長の分析であります。

## 歴史に学ぶ

ロータリーは、いろいろな側面を持っています。従って、ロータリーを理解するためにはいろいろな側面から分析をしなければなりません、時間の都合もございますので、今日は、本年度の R I テーマという視点からロータリーを眺めてみたいと思います。

第一に CONSISTENCY—堅実。辞書を引いてみますと、これは論旨が一貫していること。つまり、過去から現在に対して一貫して物事をやること、過去にやっていたことと現在やっていることとの間に食い違いがあってはならない。それから、現在においても、物事に倫理の整合性がなければならない、という意味であります。

ロータリーは昔、隆々として栄えていました。その時にやっていたことをもう一度やり直そうじゃないか。そうすれば今のロータリーは、また昔の繁栄を取り戻すことができるだろう。そのためには、歴史に学ぶ、昔の人の知恵に学ぶということが前提になります。

昔のことを学ぶのにいい教科書があります。1959～60年度 R I 会長のハロルド・トーマスという偉大な思想家がいますが、この人は、1905年から1970年まで、その時代に生きたすべての指導者から、直接話を聞いて本を書きました。名付けて『ロータリー・モザイク』。モザイクというのはガラスの破片であります。緑、青、黄、赤のいろいろな破片でモザイク模様をつくっている。あたかもロータリーの思想の世界というのは、いろいろな思想がお互いに他を排斥することなく、他の思想から謙虚に学び取ろうとする。まさにモザイク模様のようにちりばめられて存在している。そういうことを万感の思いを込めてつけた題名が『ロータリー・モザイク』であります。

そのハロルド・トーマスが、最後の章の冒頭に、「われわれ多くの者は憂慮に堪えないのであるが、ロータリーがその上に樹立されて今日の力と安定にまで築き上げられた、その基本的特質の二つが次第に希薄に、さらにより希薄にされる方向に向かう傾向がある。この二つとは、会員制度における職業分類の“原則”と、もう一つは例会への規則的出席である」と言い切っております。

例会を大切に、一貫してわれわれの先輩はひたすら心を磨いてきました。ロータリーの第一義は何か。心の開発、ロータリアンに奉仕の心を授けることあります。そこで心に愛の火がともったロータリアンが

一歩クラブの外に出ると、千差万別な社会状況に応じて奉仕の実践をしていく。これが実践の世界であります。それ故に、ロータリーは例会を大切にします。そして、その例会を構成しているメンバーは、一業一会員制で選ばれた良質な人でなければならない、ということもまた大前提なのであります。

ロータリー運動は、1905年、ポール・ハリスという青年弁護士の頭脳にボタリと宿った一滴の発想、それが一業一会員制でありました。その制度のもとに良質な人たちが集まり、やがて、その中からやがて優秀な思想が生まれました。その思想を慕って、また人が集まり、さらにいろいろの思想が生まれました。

1911年、ミネアポリス RC の初代会長フランクリン・コリンズという人が「サービス・ノット・セルフ」という提唱をしました。そして、人類連帯の自覚を説いた偉大な思想家アーサー・フレデリック・シェルドン、ロータリー財団の提唱者であるアーチ・C・クラフ、さらに1923年に関東大震災が起こったときの R I 会長であったガイ・ガンデーははじめ、多くの人たちがそれぞれ独自の思想を提唱し、まさにハロルド・トーマスが『ロータリー・モザイク』と表現したようなすばらしい思想の世界を形成し、94年の歳月を閲して、滔々と流れる大河のごとく今日に至っています、これがロータリーの思想の潮流であります。したがって、ロータリーの歴史の流れのどの時点を切ってみても、その横断面には、思想の混在が見られます。いろいろの良質な思想があるからこそ、ロータリーは次第次第に発展し、巨大な組織になったのであります。

## 命がけて守った例会

日本のロータリーの話をしていただきます。日本のロータリーは昭和の初期、軍閥の弾圧を受けました。ロータリークラブというのはアメリカに本部があり、「アメリカのスパイの手先だ」と、軍閥があらゆる弾圧を加えました。昭和8年、京都 RC に右翼の壮士の一団が押しかけました。時の会長は京都電灯の社長でありました石川芳次郎氏。石川会長は、ロータリークラブというのは世界的な組織であって、私たちは皆、良質な職業人です。職業を通じて世のため人のために動いているので、決して国の利益に反することではありせん」と言ったのですが、納得してもらえず「証を立てろ」と迫られました。

そこで石川会長は証を立てるために2つの条件を提示しました。それが、例会で「君が代」を斉唱することと、例会場に「日の丸」を掲揚することでありました。その後、ロータリークラブの例会では「日の丸」を掲げ、「君が代」を歌う慣例ができました。これは、私たちの先輩が軍閥の弾圧を逃れるために、血のにじむような思いで開発した慣例であります。したがって、皆さんは、例会でただ何となく「日の丸」を掲揚し、「君が代」を歌うのではなく、そのことを心にとめておいていただきたいと思ひます。

当時の弾圧の例をあげればきりがありません。先輩たちは、一生懸命努力を重ねたのでありますが、結局、国家権力には対抗することができず、昭和15（1940）年、8月8日、静岡RCが解散しました。それに続いて、次々と解散していきました。最後に、9月11日、日本の第1号であった東京RCの壇上に、日本ロータリーの創始者である米山梅吉先生が、重い足を引きずって立てられました。「こんなにづらい気持ちで皆様に語らねばならないのは、20年来はじめてである。私は、ただかかる結末になったことをお詫びしたい。創立以来の20年を顧みるとき、誠に感慨無量である。日本のロータリーが、日本国社会に文化的、経済的、社会的にさまざまな貢献をしたことは燦として輝いている。私の脳裏には今、走馬灯のようにそれらが彷彿としてくる。私はただ、皆さまに御礼を申し上げ、このような事態に至った私の不行き届きをお詫びしたい」。これが軍閥の弾圧によって潰滅した日本のロータリーの最後の姿でありました。

では、そこでロータリー運動が終わったのかと言えば、実は終わりませんでした。確かに、日本のロータリークラブは国際ロータリーからすべて離脱しました。しかし、クラブの名称を変えて、翌週から、また例会を続けたのであります。東京RCは水曜日が例会ですから東京水曜会、大阪RCは大阪金曜会、札幌クラブは札幌職能協会、福岡RCが福岡清和会。名称を変えればいざいざと思われる方もおられると思いますが、解散させられた理由を考えますと、これはただごとではありません。命がけのことです。

戦前のロータリアンは、あたかも隠れキリシタンのように身の危険をおかしてロータリー運動を続けていきました。何が彼らをそこまで燃え上がらせたのだろう。神戸RCの直木太一郎氏は、「やはり戦前の人たちは、ロータリー運動の崇高性。高潔な倫理に基づいて職業奉仕の実践をはじめ、いろいろな知恵の交換を通じて世のため人のために動いていく、このロータリー運動の崇高性を忘れることができなかつた。その中心にあるのが例会なのだ。例会を休むわけにはいかなかった」と言っておられました。

戦後、昭和24（1949）年に日本のロータリーは、国際ロータリーに復帰して、飛躍的な発展を見せました。戦前のロータリアンのエネルギーが、その発展の原動力になったことは紛れもない事実であります。昭和35（1960）年ころまではそのエネルギーが続いていました。しかし、次第にこの人たちがこの世を去って、日本のロータリーは若干衰退の傾向にあるかと思うのであります。

#### 職業倫理を高め信頼を

第二のCREDIBILITY—信望。辞書を引きますと、このほかに信用とか信頼という意味もあります。ラビツア会長は「この信望、信用、信頼は、伝統的にロータリアンの顕著な特徴であった。歴史を顧みればわか

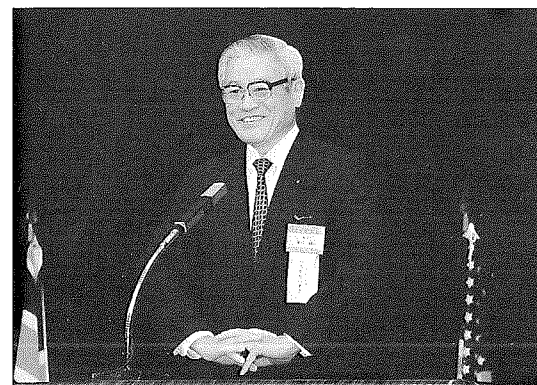
る。例会で心を磨き、職業倫理を高め、そのことによって地域社会からの信頼も得られたし、ロータリー自体も絶対的な信頼の世界をつくることができた」と、言っておられます。

職業奉仕の例を出しましょう。自分の商品を売りたいために少し誇大に広告をする。その時は売れるかもしれないが、お客さんは買えばわかります。この広告は少し誇大だな、商品はそれほど良くない。それによって信用が失われますから、二度とその商品を買わなくなります。したがって、物を売る前には誇大広告をしてはならない。例会を通じてこのような知恵の交換をしました。そして、例会において、あらゆる企業上の情報とかノウハウを交換して、それを自分たちの企業に適用し、どのような不況期にも絶対に潰れない、強靱な体質の企業をつくり上げる原理を開発しました。そして、その知恵の総体を、ロータリーは1927年、職業奉仕と名付けたのであります。

しかしながら、ロータリアンだけが倒産せず隆々と栄えて、それでいいのか。ロータリアンが世のため人のためのことを言うのであれば、自分たちだけが栄えるのはエゴイズムになる。同業者のために、そのノウハウを公開して同業者とともに栄えていく。ノウハウを公開する場として同業組合をつくらうじゃないか。同業者だけではない、アメリカ社会のすべての企業家がみんなお互いに栄えていこう、共存共栄の実をあげようじゃないか。そのことによって初めてロータリーは世のため人のため、奉仕ということを考える意味があるだろう、と言って商工会議所を倫理を提唱する団体として蘇らせていきました。

職業を通じて世のため人のためにというのは、まさにこのことを言うのでありまして、弁護士の無料法律相談、これは職業を通じて世のため人のためだから、これは職業奉仕だと考える人がありますがこれは違います。職業奉仕と社会奉仕を分かつ基準は何か。ロータリアン自身が受益者になることを職業奉仕。これに対して、ロータリアン以外の人が受益者になるのを社会奉仕と言います。

したがって、無料法律相談とか無医村における無料診療は、受益者はロータリアン以外の人でありますから、社会奉仕であります。何はともあれ、職業奉仕によって、ロータリアンのCREDIBILITY—信望が高まっ



ていくわけでありませぬ。

このことは知識だけの問題ではありません。1923—24年度の国際ロータリーの会長ガイ・ガンデーガーが、1916年に初期ロータリーのバイブルと言われている『ロータリー通解』という有名な本を出しました。その中で「ロータリーは、上辺だけの人間を作るものではなく、人間の体質改善を行うものである。ロータリーの内部で体験を積むにつれて、人はロータリアンとなる」と言っています。

#### 行動を

第三にはCONTINUITY—持続であります。この言葉は、今までに申し上げました CONSISTENCY CREDIBILITY この2つとは全く違った分野の言葉であります。ロータリーには2つの側面があります。即ち、心を磨く側面と行動する側面。ラビツア会長は、このCONTINUITYを主として、「行動するロータリー」の側面に重点をおいて使っておられます。CONSISTENCY と CREDIBILITY は、むしろ、クラブの中で心を磨く部分に主として重点があると思うのであります。

ロバート・バース R I 会長が提唱されたテーマ、「行動に信念を 信念は行動に」。即ちその磨かれた心は行動に表れなければロータリーの奉仕とは言えない。これは、1923年のセントルイスの国際大会で採択された決議23—24号第4項（『1998手続要覧』80ページ）にあるロータリーの奉仕とは何かという定義にその根拠があります。ロータリーの奉仕というのは単なる心の状態ではなく、その心が行動として客観化したときに、初めてそれはロータリーの奉仕と言える。行動しなければロータリーの奉仕とは言えない、と規定しているのであります。

CONSISTENCY CREDIBILITY CONTINUITY この3つのことをやっぺいこう。これは起死回生の策だ。しかし、具体的なプログラムがないと困る、という声もあります。ラビツア会長はそれに対しての目標を用意されています。

第一は、ロータリーはその歴史において、信奉してきた高潔な倫理、職業倫理、その他諸々の倫理にもう一度目を向けよう。この高潔な倫理、それに基づく行動は、ロータリーの独自性を形成するものである、と。これは言わずと知れた職業奉仕の提唱であります。われわれは職業人であるから、職業を通じて、世のため人のために動いていかなければならない。

第二に、「会員の質を高めてほしい」と。「拡大をやめるわけにはいかない。したがって、質の良いロータリアンを入会させてほしい。そして、今いるロータリアンの原石を磨こう。そのために今いるロータリアンの教育研修プログラムを実施しよう。そのことによって初めて21世紀に美しき土壌を残すことができるだろう」と。この中には過去に学ぶ、CONSISTENCY という物の考え方があることを忘れてはならないだろう

と思います。

第三に、「ロータリアンすべてが真のロータリアンになってほしい」と。「熱心でないロータリアンは、われわれのロータリーという組織に書をもたらし兼ねません。クラブの士気を低下させるし、地域社会からのロータリーのイメージを低下させる。このためにも、全会員が真のロータリアンになってほしい」と。

今、激動の世紀末に生きている私たちは、人類の未来に対して責任があるだろうと思います。ラビツア会長は「未来に対して責任を果たすかどうかは、世界中のロータリアン一人ひとり、皆さんの責任ですよ」と呼びかけておられます。

第四に、「クラブにもっとロータリー精神を導入しよう」と。かの文豪ゲーテが、この世を去る臨終に際して言いました。「暗すぎる、もっと光を」と。1956—57年度、ジャン・P・ラング R I 会長は「ロータリアンは、もっとロータリーを」と提唱しました。私は、もう少し大きな視野において、ロータリーをこの倫理運動の視点から見限り、今のロータリーの世界はあまりにも暗すぎる。したがって、「ロータリーにもっとロータリーを!!」と申し上げたいのであります。

（「ロータリーの友」1月号より転載）

